

100年企業

社員を大切に する経営が 高齢者の笑顔 輝く職場を 実現

鍋屋バイテック会社

岐阜県関市郊外の広大な緑地に本社機能を

置く、鍋屋バイテック株式会社（通称「鍋屋バイテック会社」、金田光夫代表取締役社長）。同社のものづくりの源流は、戦国時代の1560（永禄3）年までさかのぼる。織田信長が桶狭間の戦いで今川義元に勝利し、戦国時代の終焉に大きな役割を果たす英雄として表舞台に登場した年だ。100年どころか、450年以上の歴史を受け継ぐ企業ということになる。

同社の創始者たちは、高度な知識と技術を身につけ、鍋、釜、燈籠、鐘などの铸件をつくり、朝廷からは「御鋳物師」の免状を授かった。千利休から届いた礼状（国宝）も現存する。社名の「鍋屋」は、公認の匠のグルー

プとしての屋号なのだという。

現在、ナベヤグループには、創業一族で「岡本太右衛門」を代々襲名する株式会社ナベヤ、そして株式会社岡本があり、鍋屋バイテック会社は1940（昭和15）年に創業家から独立してできた標準機械部品の製造会社である。同社の主力商品はプーリー（滑車）。铸件でできた車輪状の部品で、外周にベルトをかけてモーターやエンジンの動力を機械に伝える部品だ。機械設備がある工場には欠かすことができない。単価は数百円から数万円という商品ながら、「多品種微量生産」（製品の標準化を極限まで進め、1個からの注文にも応える生産体制）と「寿司バー方式」（寿司職人のように、お客さまが必要なものを、そ

のときに必要なだけ提供すること）という斬新なコンセプトを打ち出すことで顧客の信頼を勝ち取り、全国シェア約8割を占めるようになった。

現在同社は、岐阜県で「就職したい会社」、「働き続けたい会社」のトップクラスに入っている。「社員を大切にする経営」を掲げ、それが実践されているからだ。一例をあげれば、一流の建築家が設計し清潔な作業環境を実現した工場、社員の資格取得に対する自己啓発支援、さらにはパートタイマーに対する退職金制度など。「働きたい」と思わせる、魅力あるメニューがいくつも並んでいる。

「自社ブランドの機械部品を開発・製造・販売し、日本国内はもちろん、世界中のお客



シニアマイスター第1号の上橋行夫さん

さまと取り引きしていますから、ビジネスの観点からは、地域とのつながりは、決して濃いつとはいえませんが、企業の地域貢献がよくいわれますが、通勤時間30分以内の地域におよそ99%の社員が居住している当社の場合、社員にきっちり給料を払い、安定した生活を

高齢者が働く姿は未来の自分

現在同社の従業員は330人（パートタイマー含む）。役員を除く60歳以上の高齢者は16人（うちパートタイマーは10人）を数える。

現在、同社の定年は60歳。定年後、フルタイム勤務を希望する場合は、1年契約の嘱託社員として再雇用され、上限年齢の65歳まで契約更新が可能。さらに65歳以降も働き続けたい場合は、雇用形態は時給制のパートタイ

地域貢献と考えています。ですから、社員を大切にするのは当たり前のこと。経営の基本は社員とその家族です。当社が450年の歴史を刻むことができたのは、こうした積み重ねの結果ではないかと思えます」と金田社長は力を込める。

マーに変わる。この場合の上限年齢は設けていない。現在の最高齢者は69歳。

ちなみに、60歳以降、何らかの理由で短時間勤務を希望する場合は、65歳以降の場合と同様、時給制のパートタイマーとして勤めることも可能だ。

金田社長は、「定年は60歳ですが、そう遠くない将来に65歳まで定年を引き上げることになります。そして、その後は70歳までということになるでしょう。これは時代の要請ですね」と話す。

シニアマイスター制度を新設

社員を大切にしている経営を掲げている鍋屋バ

では、金田社長は高齢者の雇用をどのように捉えているのだろうか。

「企業にとって、60歳以上の高齢社員にいかにも働いてもらうかは大きな課題です。窓際族のような扱いをするのはもったいない。それでは企業にとっても高齢者本人にとっても、もったいない話です。いかに楽しく、その人が力を発揮して働いてもらうことができるか。それを考えるのが経営者の責務ではないでしょうか」

実際、同社で働く高齢者の表情はどの人も明るく、ころなしに足取りも軽いようにみえる。

「60歳以上の働き方が、高齢者本人にとって切実な問題なのは当然ですが、後に続く40代、50代の社員にとっても切実な問題であるはず。10年後、20年後の自分の姿がそこにあるからです。しっかりとした仕事ができる。そうだと、楽しく働けそうだといった思いがもてる職場にすることが大切。将来の自分の姿を明るく思い描くことができれば、目の前の仕事の仕方も変わってくるでしょう」と金田社長は話す。

イテック会社に、昨年4月、新たな制度が誕

生した。シニアマイスター制度だ。

経験と実績を兼ね備えた社員が任命されるこの制度、初代シニアマイスターに任命されたのが上橋行夫さん（62歳）。

上橋さんの経歴を簡単に紹介しよう。1964（昭和39）年3月に15歳で同社に入社。鹿児島県からの集団就職だったという。当時の岐阜工場を振り出しに、各務原工場勤務を経て、1974年に新設なった関工園（後述）に異動した。約43年間、鋳物を中心に機械加工製造部門の業務に従事、この間、2002年からは執行役員機工部部長を務め、2009年3月に定年を迎えた。

上橋さんは現在、午前中は製造部門での現場作業、午後からは職場の改善活動に従事している。いずれも、これまで蓄積した経験が生かせる業務だ。栄えある初代シニアマイスターに普段から考えていることを聞いた。

「これまで経験してきたことをオーケストラにたとえてみると、華やかな音色のトランペット奏者（Vプリーリーの加工者）、旋律を奏でるバイオリン奏者（フランジ形たわみ軸継手の加工者）などを経験し、他にもいろいろな楽器の演奏（多様な鋳物製品の加工）もすることができました。はからずも指揮者（執行役員機工部部長）の役割も担いました。それぞれが貴重な経験です。シニアマイスターとなった現在、その役割は、劇場を最高の環境に整えて、演奏者、つまり社員が最高のコ

ンディションで仕事ができるようにすることだと心に決めています。お客さまに満足していただけるコンサートが開演できるように、切符係、照明係、音響係、代理奏者、何でもやる覚悟ですよ」と笑顔で話す。

上橋さんの言葉からは、同社におけるシニアマイスターの役割がうかがわれるが、目の前の課題としては、同社で2011年度の改善方針として掲げられている「リードタイム（製造指示から完成までの時間）5%短縮」「自動化の推進」「他部門を巻き込んだ改善」の3点があるという。「現場のムダを発見して改善につながるようなアドバイスの後輩たちに送りたい」と上橋さんは続ける。

半世紀に及ぶ鍋屋バイテック会社での勤務、シニアマイスターはその集大成といってもよいかもしれない。最後に上橋さんは、次のような感謝の言葉を口にして職場に戻っていった。

「第1号としてシニアマイスターを拝命し、本当に感謝しています。それだけに、現役の部長職にあつたときのような緊張感をもって仕事に向かい合っています。これまで多くの部門で仕事をしてきましたので、たくさんのお僚と知り合えましたし、数多くの製品にふれることもできました。シニアマイスターとしての仕事も、こうした出会いが糧になっています。何歳までとはいえませんが、元気に動けるうちは現役でいたいですね」

各務原工場



永田 峻さん（66歳）

勤続50年。プリーリーの製造を知り尽くした大ベテラン。大型のプリーリーの造型を手掛けている。「これまでの経験を生かし後輩の手本になるように心がけています。70歳までは働きたいですね」



鈴木明信さん（63歳）

勤続7カ月。仕事のかたわら通信制の大学で社会福祉士の資格を取るべく勉強中。「社員の皆さんは、とにかくよく働くので感心しています。これも伝統のもとらす力なのでしょうか。負けないようにがんばります」



大塚勝弘さん（63歳）

勤続48年。入社以来、鋳物の製造工程はひととおり経験。現在は、中子（砂型）の製造を手掛けている。「事故を起こしてはたいへんですから、安全には十分注意しています。早寝早起きが健康の秘訣です」



幅 正彦さん（64歳）

勤続23年。40歳のときに入社し、以来、製品の配送を担当。「毎日、自動車の運転をしていますから、やはり健康に注意して、安全運転を心がけています。長く働くコツは、無理をしないことかもしれません」



古川司朗さん（62歳）

勤続46年。機械加工に従事し、その後、鋳物営業部に異動。現在、中部地区を担当。「会社にはたいへんお世話になりましたから、ご奉仕の思いで働いています。長く働くにはやはり人間関係が大切ですね」

鍋屋バイテック会社の歩み

・1560（永禄3）年

鑄造業を始める

・1749（寛延2）年

御鑄物師免許を授かる

・1940（昭和15）年

鍋屋工業株式会社を設立

・1974（昭和49）年

関工園第1期工事完成

・2001（平成13）年

鍋屋バイテック株式会社へ社名変更

・2005（平成17）年

第1回ものづくり日本大賞優秀賞を受賞

・2006（平成18）年

元気なモノ作り中小企業300社に選定

それぞれの持ち場で、力を発揮する

鍋屋バイテック会社には2つの生産拠点がある。関工園と各務原工場だ。

関工園は、施設がまわりの自然と融和するように配置されている。なぜ「工場」ではなく「工園」なのか。関工園は、工場でもあり、かつ公園でもある「ガーデンファクトリー」というコンセプトに基づいて建設された。工園とは「工場＋公園」の造語。敷地内には緑も多く、コンサートホールや岐阜現代美術館（無料で観覧可能）も併設されている。

使したハイテク鑄造ラインをはじめ、金型・鑄造機械・搬送ラインの自社開発・自社製作を進め、鑄物製品の「多品種微量生産」を実現した。

前述のとおり、両工場では16人の高齢者が働いている。いずれのかたも、同社にとってかけがえのない戦力だ。

「せっかくの機会ですから、シニアマイスターの上橋さん以外の社員の声も聞いてみませんか」

金田社長からのたつてのご希望に答え、多少駆け足にはなるが、両工場で働く高齢者の声を紹介しよう。

関工園



高島春夫さん（60歳）

勤続37年。入社以来、総務、財務、庶務を担当。「この会社のいいところは、アットホームな雰囲気だということでしょうか。まだ定年になったばかりですが、やり残したこともありますから65歳までは働きたいと思います」



田畑とき子さん（63歳）

勤続15年。製品の出荷部門を担当。手元を見つめ集中して作業する様子に人柄があらわれているようだ。「発送物に間違いがないように、細心の注意をはらっています。健康に注意して65歳までは働きたいですね」



井上敏行さん（64歳、勤続34年）

井上としゑさん（64歳、勤続3年）

ご夫婦で勤務。製品の塗装作業を担当する敏行さんは「冬は塗料の乾くの時間に時間がかかるので、納期に遅れないよう気をつけています」。としゑさんは清掃などが担当だが、社内に置かれている鉢植えも管理する。「花を見て、社員のみなさんが少しでもなごんでもらえれば」



野畑久男さん（64歳、勤続20年）右

袴田澄夫さん（64歳、勤続5年）中央

森 東洋一さん（69歳、勤続5年）左

製品の発送業務を担当。ブーリーは意外と重い。「腰を痛めないよう、無理をしないのが秘訣。みんなが、おはよう、こんにちは、とあいさつを交わす明るい会社です」と声を揃える